

# 「在来溪魚ワークショップ」テキスト

第 15 回石徹白 Fisher's Holiday! 2015 年 6 月 6 日 AM10:00 頃より開始

私たちの考える在来溪魚の生態系の理想は「その川に昔からいた天然魚が自然繁殖して生息し続けること」です。しかしこの理想も、もうどうにもなくなってしまった川が多いのが現実です。

ありがたいことに石徹白川にはハプロタイプ Hap-new36 という在来イワナが命をつないでいます。この貴重なイワナはもちろんのこと、その生息する環境をそのまま守って行きたいものですが、守れるか、絶やすか、その鍵をにぎっているのは間違いなくわれわれ釣り人です。守ると言ってもイワナを放流したりするわけにはいきません。そのようなことをして一旦交雑がおきてしまえば遺伝子的に絶やすことになります。

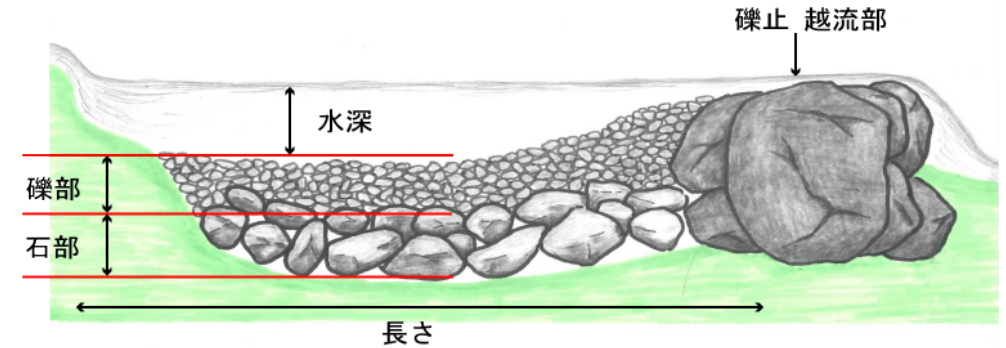
このワークショップでは、このようなところに留意しながら在来溪魚を絶やさないために、釣り人ができることを皆さんと一緒に考えながら実際に行動する体験型教室です。

一回目となる今回は、峠川中流部の右岸にある桂清水の小川を溪魚たちの産卵用河川と機能するように整備します。

## ワークショップ手順

- 1 講師の安田龍司氏の指導で人工産卵場の意義と必要性の説明後、実際に一カ所造成し完成までの工程を体験していただきます。
- 2 全員で人工産卵場予定地全域を清掃し実際に魚が遡上して来られるように川までの水の道を確認します。
- 3 今回はいちばん上流に造成し、今後は下流に向かって一カ所ずつ造成して行きます。

## 人工産卵場 縦断面図



礫 (1~3cm)

石 (こぶし大)

礫止(岩・丸太等)

水深 (約20~30cm)

礫部 (約 5~10cm)

石部 (約 5~10cm)

越流部 (約 5cm)

長さ (約 2~3m)

## 作業手順

- 1 河川付近の倒木・枝・笹など作業の邪魔になるものを撤去する。
- 2 小川内の石・小枝・堆積物などを撤去する (石は造成に使用する)。
- 3 水深が 30cm~50cm になるように川底を掘り下げる。
- 4 掘り下げた下流側の礫止めの真上 (越流部) が水深 5cm 程度になるように岩や丸太で流れを堰き止める (長く使用することを目的としているため、今回は木材を使用せずに造成する)。
- 5 礫止めの上流側に、こぶし大の石を厚さ 5~10cm 程度で隙間が多くできるように敷きつめる。これが産卵場の「基礎」となる。隙間を多くすることで卵がとどまる空間ができ、さらには水の透過性が良くなることで孵化率が高まり、重複産卵があっても卵が掘り返されにくくなる。
- 6 こぶし大の石を敷きつめた「基礎」の上に 1~3cm の礫を厚さ 5~10cm 程度になるように敷きつめる。礫止めに向かって徐々に水深が浅くなる「淵尻の駆け上がり」になるように造成する。

## 造成に必要な道具類

ジョレン・スコップ・ツルハシ・バール・金バケツ・手み・土のう袋・軍手等。  
河原で礫を採取する場合は、網目 10mm~15mm 程度のメッシュコンテナや  
買物カゴなどが必要となります。



礫の敷きつめ作業風景

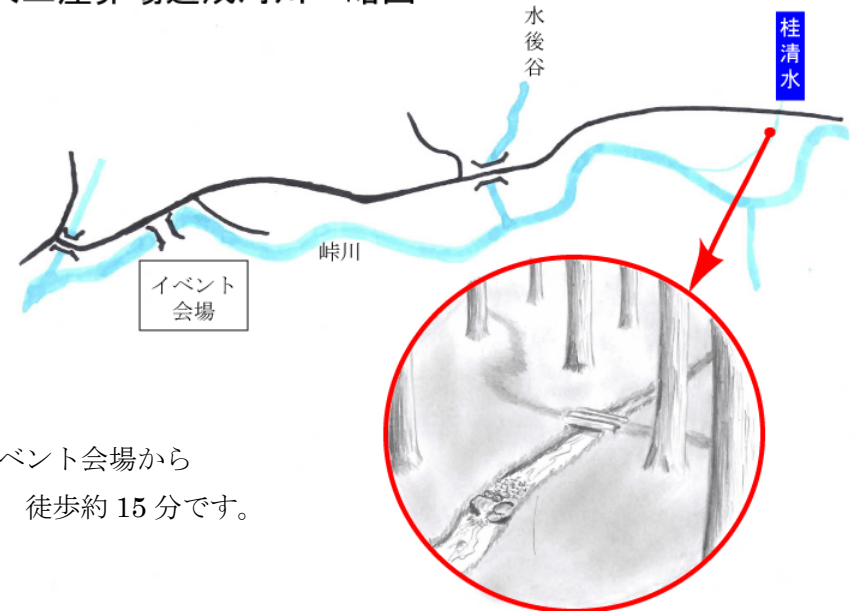


メンテナンス作業風景

## 注意事項

- ※湧水などの安定した流量の河川ではあまり気お付けなくても良いが、水位が変動しやすい河川に造成する場合は、産卵期から孵化期に人工産卵場が干上がったりしないように、礫止めの高さや水深などに考慮が必要となる。
- ※礫止めの頭が水面上に出ていると、落ち葉などが引っかかり人工産卵場の機能が低下するため、礫止め部分に落ち葉などが溜まらないように注意する。
- ※ヤマメやアマゴはイワナよりも早い流れの場所で産卵することが多い（淵尻の駆け上がりなど）。イワナは意外とどんな場所でも産卵をするようだ。但し産卵後の孵化率を考えると、人口産卵場を造成することが重要となる。
- ※人工産卵場は一度造成すれば何年も機能するものではありません。毎年メンテナンスをすることや、産卵状況を観察し改良などが必要です。

## 人工産卵場造成河川 略図



※イベント会場から  
徒歩約 15 分です。

造成後のイメージ図



人工産卵場に遡上してきた  
イワナのペア



造成済みの人工産卵場